

続・ 珈琲の思い出 39

鈴木優子

穏やかな日曜日の昼下がり、愛する人に会えた喜びと、あと二日ですぐにまた会うことができる、という嬉しさに優子の頬は自然とほころび、とても優しい気持ちになることができた。

帰宅すると、夫と娘たちはまだ帰宅していなかったので、ソファに腰かけると、携帯を開いた。すぐにでも和樹にメールを送りたかったが、帰宅した和樹が妻や息子と一緒にいるかも知れない、と思うと、ちよつとためらった。

その逡巡している瞬間に、当の本人からメールが来た。

「優子さん、さつきはありがとうございました。会えて嬉しかったし、あのカフェのコーヒー、マジで美味かった♥」

「こちらこそ、ありがとうございました。一緒に美味しいコーヒーが飲めて幸せでした。なーんちゃって、ちよつと大げさかな?」

「で、火曜の夜、どうする?」

「え!?ちよつと待って!考えさせて。」

「えー?!?行けないの??」

「行けるってば!もう全くせつかちなんだから!」

メールをやりとりしながら、優子はクスクス笑っていた。

「じゃ、どうするの?」

「ん?折角だから少しゆつくりしたいなあと思って。」

和樹はニヤケてしまう顔を元に戻すことができなかった。

「車出せるよ。」(続く)